



唐詩選の旅

①

高木健夫

高木健夫



詩選の旅
①

講談社現代新書

はしがき

一九六九年の一月から五月にかけて、読売新聞木曜の特集版に穴埋め原稿のつもりで連載した「唐詩選の旅」は、じつは半分は手すさびのアソビのつもりで書き出したものであった。

唐詩の和訳も、だいぶ前から酒興の間にやり出したもので、和訳というよりも私訳または戯訳ともいふべき手すさびのお恥かしいものである。

しかし「旅」については、これはむかしからのわたしの夢であった。ことに唐詩にうたわれている「中国の西北角」への旅は、青年時代からの長い夢であった。一九六六年の中国旅行のときに、それがかなえられそうになったが、受け入れ準備の点で無期延期になったのは、なんとしても残念であった。

鉄道も公路を開通した現在はいぶ開発されて、様相は一変しているだろうが、解放前までの西北中国は、唐詩にうたわれた時代と、ほとんど変わらない景観が、そのままに残っていたにちがいがなかった。

胡人^{こじん}も、胡歌^{こか}も、胡旋舞^{こせんぶ}も、きっとまだ残っていたであろう。スタインや、ペリオや、大谷探検隊や、スウェン・ヘディンから大公報の長江記者の旅行記などの強烈な印象もさることながら、西北の旅を思うわたしの心の底には、かずかずの唐詩のエレジーが流れていた。

木曜版の穴埋め記事に、何かつづき物のプランはないだろうか、と同僚から相談されたときに、わたしは数年前から出版研究の鈴木敏夫氏からすすめられていた「唐詩選紀行」のことを、ふと思い浮べた。「唐詩選の旅」はどうだい、といったら、それはいいや、やろう、やりましょう、とのって来られて、じつは弱った。唐詩にうたわれた地方を、そのつもりで旅行したことなどは一ぺんもなかったからである。何度も旅行はしたけれども、いつも新聞記者の仕事という、いそがしくきびしい目的の旅行であつたから、唐詩の面影をしのんで、悠々たる感傷旅行などとは、縁の遠い飛脚ひきやくのような旅行ばかりであつた。

しかし、それでも、その時々ときの旅行の日記やメモをみると、唐詩にうたわれた地方や、史蹟しせきを通つたり、泊まつたりしたところでは、それに関連する詩句や、私訳の下書きなどが書いてあつたりする。やはり、忙がしい旅の間でも、夜、ホテルにひとり酒などのんでいるときの、たまゆらのサンチマン（感傷）は、少年時代から頭のどこかに残っている唐詩のポエジーを呼び起こすのであろうか。そして、そのような旅の感傷が、中国に対するわが心の傾斜の度合いを深めてゆくのであろうか。

本書のなかではプロレタリア文化大革命下、一九六六年度に四十五日間にわたって旅行した印象がだいぶあるが、文革と唐詩の関係ほど、奇妙な断絶を見せているものはあるまい。それにもかかわらず、いや、それなればこそ、隣の異邦人いほうじんが、人間革命の嵐の中に、二千年前の詩

情を探るところから、何かがつかめるのではないか、すくなくとも中国文化の核の一つに触れるのではないか、という気もしたことは事実である。

文革の引き金が、第一に照準しょうじゆんをあてたのは三家村グループであったのだが、その中の一人、鄧拓とうたくが一九五八年に『新編唐詩三百首』を編しているのはおもしろい。かれはその書の序文の中で「唐詩の基本的な内容といろいろな詩形の中からよいものをもって、これを今日の人民詩歌の栄養としよう」といつている。

鄧拓は、「資本主義の道を歩む毒草」として、一発で文革の嵐に吹き飛ばされてしまった「文化人」だが、しかし、四旧打破とはいふものの、中国の文化のよい伝統を新しい角度から取り入れようという態度は現在でもかわらない。ただ、お隣の異邦人であるわたしのように、感傷的な文人趣味で唐詩を鑑賞する輩やからなどは、プロレタリア的でない、といって弾劾だんがいされるのである。

『唐詩選の旅』は、わたし自身の旅行した地域、住んだ町を中心にしてるので、そこにおのずからなる「偏向」が出ていることはお許し願いたい。

杜甫の生涯を考える上でも、中国の歴史の上でも重要な「四川の章」がなかったり、唐詩の上でも華やかな「江南の章」が簡単だったり、そのくせ、まだいったことのない「西北」について、二つも章を設けて、めんめんと図上の旅をつづけたり……といったところである。

本書を書き終わった現在でもなお、晩酌^{ばんしやく}をやりながらテープにいった唐詩の朗詠^{ろうえい}をきいてゐる。そして気が向くと詩句の私訳、試訳をやっている。唐詩の和訳はわたしの酒の肴^{さかな}のようなものだ。この肴、はたして大方の読者の味覚に堪^たえ得るかどうか、はなはだ心許^{こころもと}ない。

今回、講談社現代新書のなかに上、下二冊に分冊しておさめるにあたり、再度読みかえし、足りない不備を補い、現時点での加筆を要する所は、筆を改めた。さらには、前著で書き残した部分にも、新たに文章を加えた。

壬子季冬

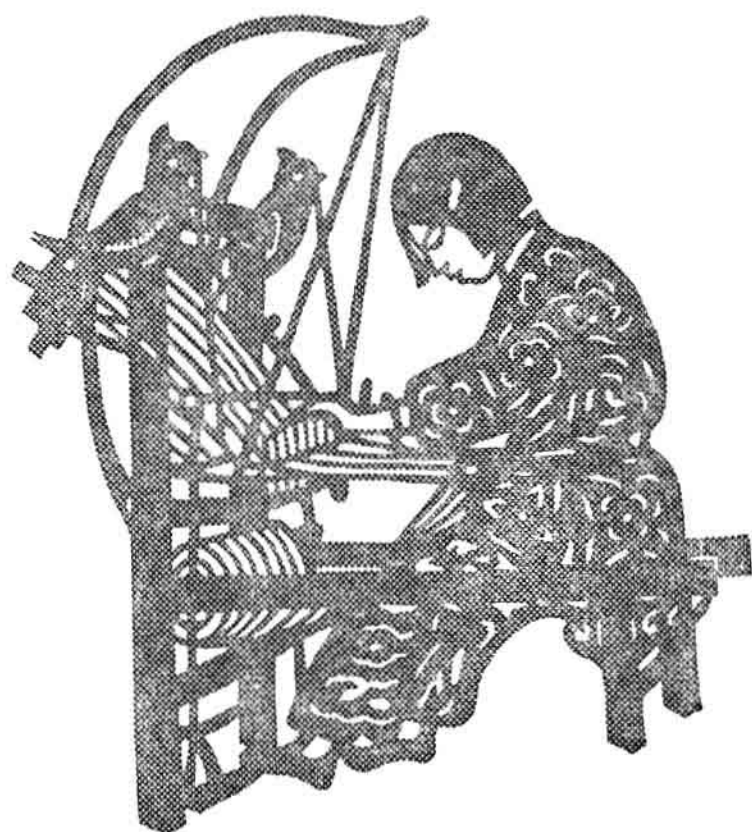
高 建 子

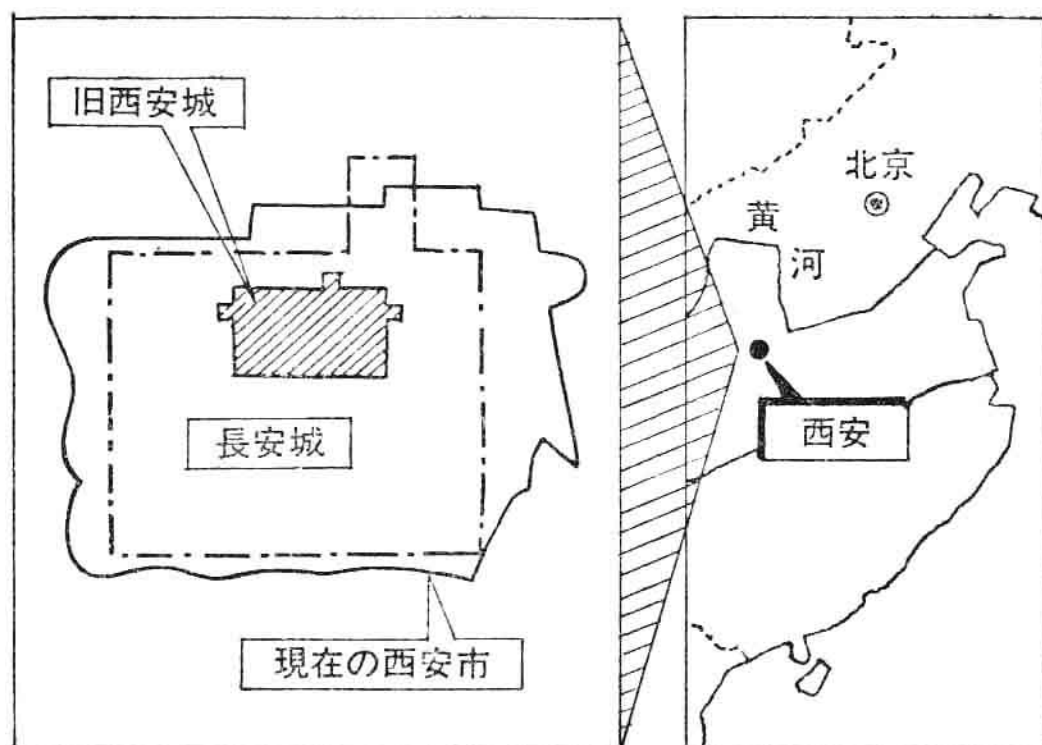
目次

はしがき	3
西安の章	9
胡沙の章	37
胡姫の章	57
延安の章	69
長恨の章	93
洛陽の章	133
黄河の章	153
太行の章	173

本文各章扉のカットは、著
者所有の中国の剪紙せんしから

西安の章





春曉 孟浩然

照鏡見白髮 張九齡

春宿左省 杜甫

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九 白樂天

飲中八仙歌 杜甫

自遣 羅隱

烏夜啼 李白

子夜吳歌 李白

送元二使安西 王維

送別 王之渙

胡笳歌送顏真卿使赴河隴 岑參

見渭水思秦川 岑參

行次昭陵 杜甫

春しゅん 曉ぎょう

孟もう 浩こう 然ねん

春しゅん 眠みん 不あかつきを 覺おぼえず 曉おぼえず
處しよ 處しよ 聞てい 啼ちようを 鳥きく
夜や 來らい 風ふう 雨うの 聲こえ
花はな 落おつることしんぬ 知たしやうぞ 多たしやうぞ 少たしやうぞ

春のあしたをうつらうつらと
あちらこちらに鳥のさえずり
夜もすがらあらしすさみしが
どれほど散った花じゃやら

ゆうべは夜半過ぎて、ホテルの窓の外では、若い男女のいい争う声があらあらしくつづいていた。ここ、西安の人民大たいか厦、国際旅行社西安分社の外賓用ホテルの寝ごこちはけっしてわるくはないのだが、外の騒ぎが気にかかった。おりしもあれや、文革さわぎのまっさいちゅうだったのだからなおさらだ。

ホテルのボーイにきいてみたら

「この服務員です」

といってそっぽを向いてしまった。窓からのぞいてみると、お下げの少女ひとりを、六、七

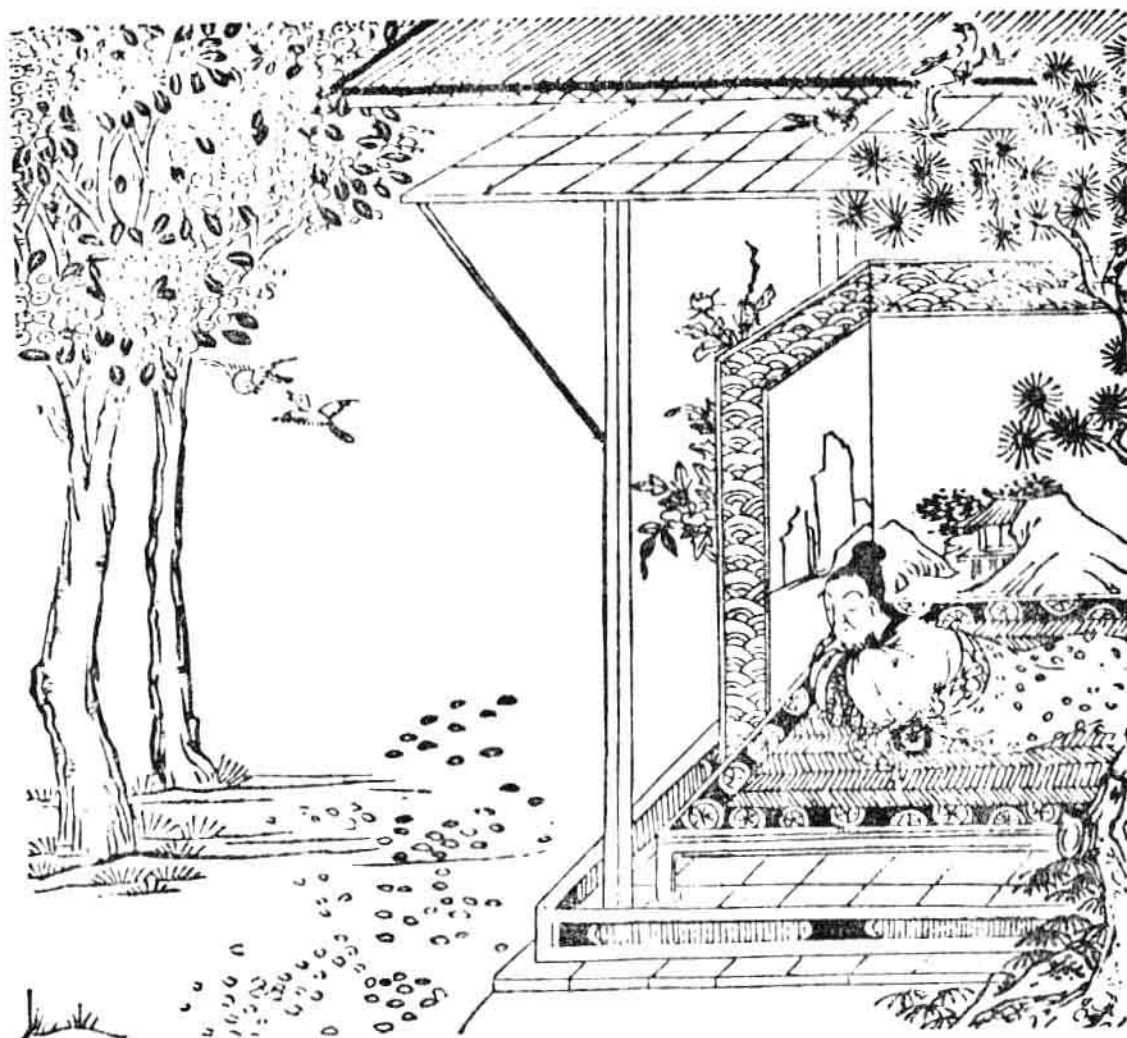
人のホテルのボーイらしい若者がとりかこんで、みんな腕組みをして立っている。はなはだおだやかでない風景だが、あらあらしい声でしゃべっているのは男たちではなくて、たった一人、包囲されている女の子のほうなのであった。

パオホワン（保皇）とかタータオ（打倒）とか毛沢東思想とかということばが、きれぎれにきこえているところをみると、どうやらこの少女は保皇派、つまり、実権派のやることをみてみないふりをして、傍観ぼうかんしていたといつて壁新聞に攻撃されたご本人で、それをそんなことはない、と大声疾呼しつこしている様子である。

つるし上げる男のほうが、むしろしょんぼりして、つるし上げられる少女のほうが、腕をふり上げたりしておそろしく威勢いせいがよい。

いやはや、とんだ「夜来、風雨の声」だわい、いや、待てよ、このプロレタリア文化大革命という名の「夜来の風雨」は、いったい、どれだけ実権派の「花を落とした」ことか。わたしは一盞いっさんの茅台酒マオタイチユウを傾けながら、千二百年前の詩句を、現代中国の文革のあたりにダブらせながら、その二重うつしの幻想にひたった。

そういえば、詩人、孟浩然もうこうねんもまた「歴史の風雨」に散った花——失意の人ではなかったか。若い時に進士の試験に落第して、四十歳のころ、また長安にやって来た。ここでは、時の侍御じぎよ史（日本流にいうと「大目付」だ）の王維おういや宰相さいしやうの張九齡ちやうきゆうれいなどと親しく交わった。進士落第生が



遠い日ののどかな春の日（唐詩選画本より）

官途^{かんど}に就こうとすれば、こうするよりほかはなかったにちがいないが、王維も張九齡も大官であると同時にすぐれた詩人だった。

たとえば張九齡には、つぎのような有名な詩がある。かれは宰相兼中書令^{ちゅうしゅしやうれい}という最高の官位から政敵李林甫^{りりんぽ}のために荊州^{しゅうちようり}長吏^{させん}に左遷され、それから数年後に故郷の広東省^{カントン}始興で病死する（七四〇年）のだが、これはそのころの作であろう。失意の人の心にせまる詩である。

（注、中書令というのは、唐朝の制度では天下の政策決定にあずかる省の大臣をさす言葉である）

照鏡見白髮
かがみにてらしてはくはつをみる

張九齡
ちやうきゆうれい

宿昔青雲志
しゆくせきせいうんのこころざし

蹉跎白髮年
さだたりはくはつのとし

誰知明鏡裏
たれかしらんめいきやうのうち

形影自相憐
けいえいみずからあいあわれまんとは

壯年なりしわが若き日の志

ついに成らずして髪白うなりぬ

誰ぞ知らむ鏡に映るわが影の

侘びしき色を憐れむ心

あるとき、孟浩然是長安の王維侍御史の官邸で話をしていた。そこへ突然、玄宗皇帝がおみえになった。あわてた王維は浩然を床の下にかくした。その場の様子がおかしいので、皇帝は「何かあったのか」ときかれた。しかたなく、じつは孟浩然という男があらわれましたので……と白状すると玄宗は

「わしもかれのことは知っている、会いたいと思っていた。何もかくれる必要はあるまい」といって浩然に会った。そして近作の詩を朗詠しろと注文した。浩然そこで「歳暮に南山に帰る」の詩を誦し、「不才、明主棄て……」という句にくると、玄宗、顔色を変え

「君が勝手に仕官しないのではないか。それをわしが君を乗^すてたというのは、わしをバカにしていることだ」とカンカンに怒り、とうとう、浩然を召し出すことをしなかった。このあたり、浩然の舌禍^{ぜっか}というべきか。

これまた「海瑞罷官^{かいずいひかん}」の戯曲^{ぎきょく}を書いて毛沢東主席をバカにした、といわれて、文革第一の犠牲になった北京副市長の呉晗^{ごかん}にはなはだ似ているところがある。「夜来、風雨の声」は宮仕えするものにとっては、政治権力者の怒りにほかならぬ。

この「春暁」の詩は、案外、玄宗の不興を買った孟浩然が、ヤケ酒のんでふて寝をしているときの感懷かもしれないぞ。わたしはさっきから寝酒のつもりでちびりちびりと傾けていた茅台酒の酔いをかけて、ベッドにもぐりこんだ。

時まさに初冬の西安。したがって「春眠」というほどのことでもなかったが、朝、うつらうつらしていると、「春眠」めいたムードになる。このホテルは、ソ連顧問のために、十数年前に建てたものだけあって、部屋はロシア風にだっぴろい。ソ連人が設計してバカでかいコンナビルを建てさせたものだから、今は維持費がたいへんで、大赤字だ、といって、西安分社の社員がコボしていた。

この大きなホテルに泊まっている「外賓」といえば、オーストラリア人の経済学者だという父娘^{おやこ}二人づれとわたしの二組だけである。この二組の客のために西安のこの「グランドホテ

ル”は、西洋と中国のふたとおりのメニューを用意しなければならぬ。私企業のホテルならば、こんにちただいま倒産^{うな}というところだ。

旅行社の李さんに促^{うなが}されて、六時に宿舎を出て、東郊の飛行場へ向かう。民航の空港は整備拡張中とあって、軍用飛行場を使っていた。

唐の時代の長安は、いまの西安旧市内をふくめて南の方に大きくひろがっていた。西安城といわれた旧市はむかしの長安の六分の一だが、いまの西安市の区域は、唐代の長安よりもはるかにひろがっている。人口も唐代の一〇〇万に比べて一四二万とある。

一九四九年は、人口は七一万、面積は一三平方キロだったが、当時見渡すかぎりの畑だった東郊は、いまは紡績センターとなって四つの大紡績工場が立ちならび、西郊は電気工業センターとなって、中国最大のコンデンサー（蓄電池）工場をはじめ、電気関係工場が目白押しになっている。

鼓楼、鐘楼のある旧城内の位置は、唐時代の皇城のあとだ。皇城といっても天子の宮殿ではなく、霞が関みたいな官庁街だったという。むかしの都大路の両側にはいまは労働者アパートがずらりとならんで現在の西安市の面積は一三一平方キロとひろがった。住宅区域だけでも唐の長安時代よりひろい。

唐といえば、あの時代のエリートは、もちろん官僚であった。しかも、その官僚生活は、派